

ブユの吸血被害

小学校児童の保護者から「子供が校庭でブユの吸血被害に遭い、ひどく腫れ上がっている。」との相談が保健所にありました。保健所と衛生動物部門が合同で現場調査を行うことになりました。

加害種の確認

相談のあった小学校の近くには、水質の良好で大きな河川があります。衛生動物部門は、過去にその川のブユ幼虫、サナギの調査を行い、多数のキアシツメゲブユ幼虫やサナギが生息しているのを確認しています。また「衛生動物だより第41号」で報告したとおり、キアシツメゲブユが人を吸血することを確認しています。

こうしたことから、この小学校でキアシツメゲブユによる被害があっても矛盾はありませんが、飽くまでも状況証拠です。そこで、確定的な調査を行うことにしました。

人おとり法

吸血被害を確認する方法の一つに「人おとり法」があります。人がおとりになって吸血に来る害虫を捕獲し、加害種を確認する方法です。最も原始的な方法ですが、吸血被害を確認するよい方法です。

保健所の担当者3名と衛生動物部門の担当者1名がおとりとなって、校庭の片隅で待っていました。15分ほど経過したころ、1匹のブユが吸血にやってきました。被害の確認のためには、実際に吸血行動に入るまで待っていなければならないのですが、いささか功名心にあおられ、捕虫網で捕獲してしまいました。種類は、やはりキアシツメゲブユでした。

ブユの吸血跡

吸血の症状によって、ブユによる被害なのかある程度判断できます。被害にあった児童の足を保護者の了解のうえ、見せてもらうことにしました。ブユの吸血は、「衛生動物だより第41号」でも説明していますが、のこぎりのような口器で人の皮膚を傷つけ、染み出てくる血液をなめます。そのために、咬み口にわずかな出血した跡が残ります。また、人の体質によって異なりますが、一般的な蚊の吸血の場合は、吸血されたところが部分的にジクマシンのようにはれますが、かゆみが数日続くことは、まれです。ところが、ブユの吸血の場合は、咬み口に血がにじみ、広範囲にはれあがり、かゆみも数日間残ることがあります。

児童は、吸血されてから2日間経過しています。さらに、治療も受け、薬も飲んでいますが、にもかかわらず、はれが残っていますし、咬み口も残っています。典型的なブユの吸血被害の特徴のようでした。

発生源の確認

問題を起こしているキアシツメゲブユの発生源を調べることにしました。ブユ幼虫は、河川の大きさや水量などによって生息する種類が異なります。小学校から直線距離で100メートル付近の河川は、水の流量や川幅などがキアシツメゲブユの発生しやすい河川の特徴と一致します。河川に垂れ込んでいる草木を取り上げると、大量のキアシツメゲブユの幼虫、サナギを採集することができました。この河川で発生しているキアシツメゲブユが小学校のブユ被害の原因と推察できました。

対策

加害種やその加害種が発生する河川も特定できました。ところが、残念なことに効果的な防除の方法が見つかりません。過去には、河川に殺虫剤を流し、ブユ幼虫駆除を行った事例もありますが、環境を守るという観点から、現在では、できない防除方法です。消極的ですが、ブユの被害を防ぐための長袖、長ズボンの着用、場合によっては、忌避剤を使用する程度の対策しかありません。

人おとり法で捕獲された
キアシツメゲブユ



被害に遭った児童の足

赤く腫れた
膝下

咬み口



小学校の近くを流れる河川



大量のキアシツメゲブユ
幼虫、サナギ

